

# 乗馬も文化も世界遺産も！スリランカ満喫乗馬ツアー

レポート・写真 K.U さん（茨城県）（2015 年 9 月）

スリランカで乗馬・・・？モンゴルやカナダならイメージできるけど、一体どういうところで走るんだろう。ツアー概要を見てもあまりイメージができないけど、なんだか未知の世界に行くような期待感でツアーに参加した。

到着翌日は目的地のカルピティア（Kalpitiya）まで移動で約 3 時間、幹線道路だけど、のどかで南国の豊かさを感じる街並みを見ながら、ちょっととうとうとし始めた頃に時間通りにお昼前に到着。

スリランカではホテル到着毎にいただけるウェルカムドリンクがとってもおいしく、移動の疲れを癒してくれる。Kalpitiya のホテルでは直径 2 センチほどの枝（らきしもの）がスティックのように入っている。ほのかな香りがシナモンのようなのだが、見た目が・・・大きすぎる。念のため聞いてみると、やはりシナモン!? ガイド兼ドライバーの Ananda さんが、おいしそうにしゃぶり始めた。私も続けてしゃぶってみるが、大味すぎてあまりわからない...ごめんなさい。

スリランカは予想通り日本の真夏並み、いえ、それ以上の暑さ、乗馬は真昼を避けて午後 2 時半からとのこと。コテージ調のお部屋でひと眠り、ちょっと寝すぎて慌てて準備していると部屋の外で人の声が。あ、初回から遅刻してしまう！と焦ってドアを開けると「3 時からに変更」との連絡。さすが南国、時間ルーズ！でもまったく問題ない、私も焦って準備していたところなので。

時間になり、集合場所に行き、ホテルから 1 分ほど歩いていくとお馬さんがお待ちかね。ホテルに入ってくる途中に「厩舎」のような枠組みのある場所が気になったが、やはりそこがお馬さんの本日の宿だった。

初めまして、よろしくね！と馬の鼻先をなでていくが、一頭だけ背中を向けられた...この馬こそ今回の問題児（馬）だというのが後ほどわかるのだが。

乗馬ガイドの青年と馬を管理してくれるスタッフで、一人ひとり体格に合わせた馬に注意深く乗せてくれる。サラブレッドほど大きくはないが、アラブ馬位かな？実際そちらのほうから（忘れてしまいました）来ていて、暑さに強くエンデュランスに適した馬だと教えてもらう。



準備を終えると乗馬ガイドさん 1 名とツアー参加者 3 名とで順番に出発。今日は足（馬）慣らしが目的なので、車で移動中には見られなかったような普通の民家が点在する村の中を馬がポクポクと音を立てながらのんびりと歩みを進める。茅葺のような簡単な家から、レンガ造りの家まで、様々な家をちょっと高めの位置から覗き見ながら歩いていると、家の中から大人や子供達が道まで走り出てくる。無邪気に「Hello!」と手を振ってくれる子もいれば、はにかみながらこっそ

り眺める子もいるが、外国人珍しいんだな、とこちらは元気に手を振りまくる。そんな私達にガイドさんが教えてくれた。スリランカには 250 頭位しか馬がない、みんな馬が珍しいんだよって！あら、私たちを見に来ていたのではなく、お馬さん達が珍しくて飛び出てきたのね、恥ずかしい...

でも構いません、会話はなくても笑顔には笑顔で応えましょう！素敵な笑顔をありがとう！楽しい時間をありがとう！

村を抜けると待望のビーチに到着。波が結構大きい、波が届くか届かないあたりの、水分を多少含んで砂が硬さを帯びた辺りを進んでいく。時に大きな波が馬の脚が隠れる位まで押し寄せる。お馬さん足絡まって転ばないでね！と、左右に行き来する波を見ながら歩いていると、方向感覚がマヒしてフラフラと「車酔い」のような感じになる。ビーチ乗馬経験のある同行の方が「波酔いするから、前のほう見ていたほうがいいよ」と教えてくれる。ああ、よかった、教えてもらわなければ「馬波酔い」になっていた。

しばらく進むとビーチからちょっと外れて民家が点在するほうへ移動。なんとなく見覚えのある人が大きなバケツを持って寄って来る。ガイドさんの馬がバケツに寄って行く。あ、最初に乗馬を手伝ってくれたスタッフさん達だ、馬の休憩ね。乗馬には一緒にいけないけど裏方さんとして見守ってくれてありがとう！

初日なので、常歩がメインで安全に進んでいると、犬が吠えながら寄ってきた。村を通過する時も各家から番犬の役目を担っている犬が吠えていたので、気にせずのんびり構えていると、予想以上に近づいてきて、後ろの馬が前脚を上げるのが視界の片隅に入った。振り向くと馬の上にいるはずの同行の奥さんが下に、そしてよろよろと波をかぶりながら海のほうへ。前に行くガイドさんは気づいていない！「Stop!」と大声で何度か叫ぶと、ガイドさんが気づいて奥さん救出と馬確保。挨拶の時最初に背を向けたあの馬だ。幸い砂浜の上で、すぐに馬から離れた為怪我はなかったが、砂交じりの波でずぶ濡れで夏とはいえ日暮れ間近で寒そう。風邪をひかないように早く帰りましょう！各自馬が敏感だということを改めて肝に銘じ、耳と神経を研ぎ澄ませながら慎重に帰路に着く。

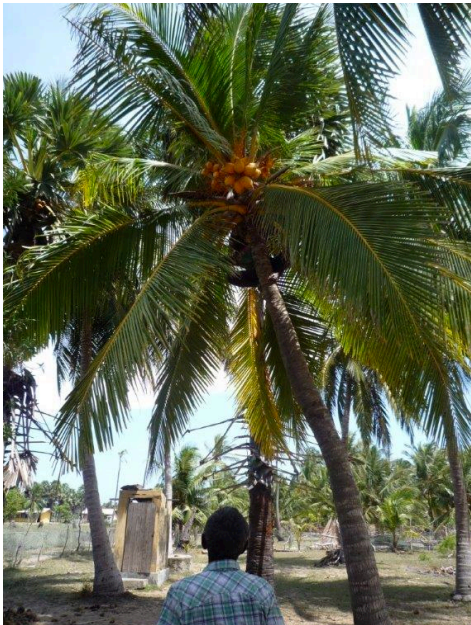
6 時過ぎ、日がだんだん暮れていく。え？まさかあの街灯なんか絶対なさそうな村を日没後に歩いたりしないよね？日没前にぎりぎり到着するよね？ガイドさん全然焦っていないし！そんな淡い期待も空しく日は暮れ、前の芦毛の馬の白いお尻がかろうじて見える位。見逃さないようにしっかり付いていく。でも、ガイドさんは真っ暗な中でも道がわかるのね、さすが！ホテル近くの大通りの灯りが見え、ほっと一息、日没後約 30 分後に無事到着。

ツアー参加の「大人」の 3 人は何の文句も言わないが、「開始が遅れた 30 分が帰り 30 分日没後になったに違いない」と心に思う。でも、乗馬時間はきちんと確保してくれたので OK でしょう、と納得する。初日からいろいろあったけど皆無事でよかった、ありがとう！

二日目はまず Kalpitiya 岬の先へ向かって、途中塩田を眺めながら馬の待つ場所へ車で移動。おとなしく馬専用の車から顔をのぞかせている馬たちに「今日もよろしく！」と挨拶する。早速、さっき車から見たラグーンの広々とした砂浜を馬で進んでいく。11 月位になったら海を馬で泳げるようだが、つたない英語力で、どうして季節によるのかがわからなかった...残念。

この日は砂浜を途中軽速歩や駆足で駆けるが、ガイドさんが飛ばしすぎないように馬たちを調整しながら、注意深く 3 人の「力量」を確認している（ようだ）。日本であまりきちんと練習していなかった自分は、軽速歩・駆足になると身体に力が入るが「ちょっとずつ距離を伸ばしていく」作戦にはまり(?) 時間とともにリラックスしていく。

天気は最高・暑さも最高！になったころ一軒の民家で馬を休ませる。民家の方が椅子を持ち出してくれ、ついでに人間も休む。日陰で一息入れて休んでいると、家の方がなにやら大きなオレンジ色のものを持ってきた。「キングココナッツ」だと言う。よく知っているまん丸で周りに毛が生えたココナッツとは見かけが違う。



大きな包丁で隅をガツンとカットし一人一個ずつ丸ごと渡してくれた。顔と同じ位の大きさのココナッツをみんなで顔の上に抱えながら、2 センチほどの穴から果汁をぐくぐくと飲む。おいしい〜！自然の天然水！？生き返る〜！おそらく中には 500ml 位の果汁があると思うが、3 人ともみんなでおかわりを要求！

すると、家の主のお父さんが、「採りに行く」と言って（と言ったと思う、多分）、目の前のヤシの木に裸足でするすると登っていく。あまりに早すぎてシャッターチャンス逃してしまい悔しがる 3 人だが、とりあえず登った所でストップしてもらい何とか写真に収める。美味しそうな頃合いのものを数個選んでカット！落ちてきたものをまた皆でいただく。飲み終わると空になったココナッツを回収していき、また大きな

包丁を振り上げて何やらカットしている。二つに割られたココナッツの空洞周囲には「プリンツ」とした 5mm ほどの白い塊がたっぷりについている。それをココナッツの外殻を削って作った天然のスプーンですくって（こすり取って）食べる。凄い、包丁さえあれば食器・道具は一切不要！自然を思いっきり体感できた、そしておいしかった。お父さん、お母さん（私より確実に若い）、みんなありがとう。休憩でおなか一杯になった後は、砂浜をのんびりと、途中貝採りをしている外国人観光客を「観光」しながら帰路につく。明日は車で百キロ以上離れた場所に移動するので、二日間お世話になった馬たちとはここでお別れかと思い確認すると、最後まで同じ馬だという。あの馬専用車であなた達も移動するのね、狭くて大変だと思うけど顔も出せるから大丈夫かな？明後日もまたよろしくね、と挨拶して一時お別れをする。

本日の午後は観光タイム。時間通りに準備されたお昼を食べた後、ガイド兼ドライバーの Ananda さんが、何やら怖い顔した警察か軍隊の窓口へ一人向かう。しばらくすると戻ってきてみんなで車を降りてまた窓口へ行く。怖い顔した人たちが銃をもって立っている横を抜け、窓口で何か手続きをすると、一人の担当の人が施錠された大きな門を開け、私たちを招き入れてくれる。1600 年代にオランダ人が作った要塞が、今はスリランカの軍（多分）の施設として使用されていて、手続きをすれば無料で見学させてくれるらしい。いろいろと説明してくれるが、こちらの英語力のせいでほとんど意味がわからない。それでも、ガイドさんがいなかったらとても自分では来られなかったであろう場所を見ることができ、みんなで興奮気味に感心しながら見学をする。



その次は地元でも有名な大規模な教会を案内されるが、疲れた3人は外から見て「OK!」...で、そのままホテルへと向かう。ガイドさん、折角なのにごめんなさい。



Kalpitiya で二日間宿泊した Ruwala Resort Hotel は乗馬以外にも様々なアクティビティをする拠点となっているようで、Hotel 名の入ったペットボトルには写真やアクティビティが書かれている。スタッフは常に心遣いしてくれ、開放感のあるレストランや透明度抜群に綺麗に保たれたプールで、乗馬以外の時間ものんびりと過ごすことができた。そして、毎晩夕食後のんびりといつまでも、遅くまでおしゃべりしていた私たちを気長に待っていてくれてありがとう！

三日目は移動と世界遺産巡り。乗馬が目的の旅だが、スリランカの有名観光地もきちんとスケジュールに入っていて、後日後悔しないようになっている。

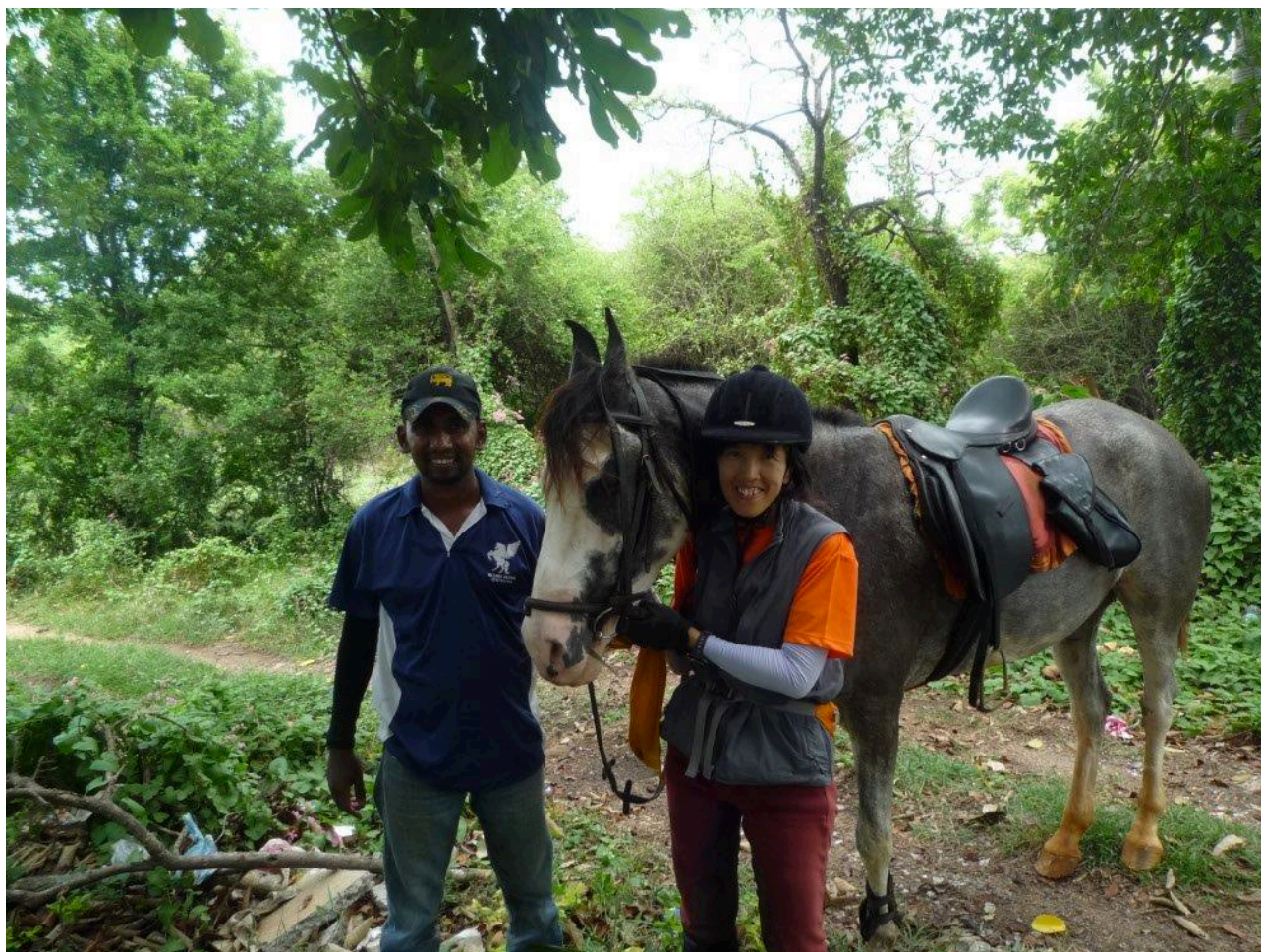
スリランカ最古の王都アヌラダプラでの寺院参観には靴と帽子を脱がなくてははいけません（禁）。もちろん肌を露出したスカートや短パンも不可。注意が必要なのは、「敷地内」は靴禁止、「建物内」だけでなく「敷地内」なので、土や砂、砂利の上もちろん裸足。真夏の日差しの下での砂・・・素足では暑くてとても耐えられない。靴下は履いていても大丈夫なので、サンダルで行く人も靴下は必需品（要メモ）。

四日目もまず車で移動。途中細い脇道に入っていく車、なんだか周りにゴミがいっぱいあるけど・・・と思っていると、前方に象の集団。野生の象でゴミ捨て場に「食事」に来るという。「ゴミ捨て場象サファリ」 こういうのを人間と象の共存！というのだろうか？違うか？



40 分ほど車で走ると、小屋＆厩舎に到着。中には二日前までお世話になった乗馬スタッフと馬たちがお待ちかね、というか生活している感じ。あら、あなた達ここが拠点で、先日は遠征してくれていたのね、お疲れ様でした。

すぐに準備して出発。先日までとは景色も変わり、湖のまわりの草原を往く。途中ヤギや牛、ロバ達が、馬が通ると顔をあげて見送ってくれる。穏やかに乗馬を満喫していると、馬たちが勝手に足を早める。「どうした！」と思っていると斜め後方から大きな水牛が数頭「ブフ〜！」と唸りながら駆け寄ってきている。縄張りに入ってしまったようだ。その後も、木のざわめきがすると、また駆け足を始める。よく見ると木の上を野生の猿が飛び回っている。  
人間は音が聞こえてもほとんど気づかないが、馬は「気配」まで敏感に感じ取る。初日のことを思い出し手綱を引き締める。



湖から外れて山へジャングルの中へと緩やかだが坂道を進む。「ダ〜スティ(馬の名前)！、が〜んばれ！」と繰り返すと、馬の耳が真後ろのこちらを向く。耳がロバのように大きくて 180 度回転する珍しい馬だというのが、馬に「かまってもらえている」ようでとっても愛おしい。

人も住んでいないような自然の中で乗馬を楽しむと、壁もない小屋がある広場へ出た。今日の乗馬はこれで終わり。馬達は鞍を外されるとそのまま何も付けずに開放された。どこまでが「この敷地」か、見てもわからないくらいのこの場所を馬たちは自由に走り回れるという。確かに厩舎はなく、人が寝る(壁もない)小屋しかない。寝転んで背中を地面にこすりつけて掻く馬、食事準備中のニンジン横取りしに来る馬、突然ダッシュして他の馬にちょっかいだす馬、早速自由を満喫している。今朝出発の場

所があなた達の住まいと思ったけど、こっちが本拠地だったのね。ゆっくり休んでね、今日も一日ありがとう！

お昼はその小屋の横に立っている食堂でいただく。レストランとは違い、家庭料理とおぼしき様々な料理が16皿も並んでいて、好きなものを好きなだけいただいた。

まさかあの馬のスタッフ達が作った訳ではないだろう、と思っていたら、奥のほうから女性が現れた。いままで全く女性気がなかったが、私たちのお昼の為にこんなにたくさん作ってくれたのね、ありがとう！スリランカの本当の家庭料理が食べられてとっても満足、おいしかったよ！

午後はフリータイム。象サファリや象乗り体験のオプションに参加もできると教えてもらうが、3名中2名がラオスで象乗りキャラバン経験者、せっかくだけど、象は十分楽しんだから、今回はNo Thank you!

同行のご夫婦は別のオプションでアーユルヴェーダへ、私はひと眠りして涼しくなった夕方からホテルのマウンテンバイクをレンタルして、目的もなく散策へ。地図もなく、あたりまえだけど住所表示もない、道しるべとなるような建物もない。行く道先々で、途中「曲がりたい」衝動に駆られるが、一度曲がったら帰れなくなってしまいそう。意思を強くもってひたすらまっすぐ進む。途中クジャク？イグアナ？のような生き物が道を横切る。馬に乗っている時でなくてよかった！

時折現れる民家の人々は、私を見つけると皆手を振ってくれる！「Hello!」「Bye!」たったそれだけ、だけど今回は馬ではなく確かにこちらに挨拶をしてくれている。目的なくオンボロのマウンテンバイクで走っているよそ者を暖かく迎えてくれてありがとう！ただひたすらまっすぐ走っているだけだから、数十分後にはまた折り返してくることになる...ちょっと恥ずかしい、でも「また来たよ!」と明るく手を振り笑顔で会話する。

とうとう乗馬最後となる五日目。昨日お別れした場所まで車で移動。途中四駆に乗り換えないと進めない場所だが、四駆の運転手さんが大遅刻。きっと寝坊したのだろう、お仕置きはチップなし！

乗馬スタッフは準備万端で到着後すぐ出発。4日目なので馬にも慣れ、頻繁に駆け足でジャングルの中を走り回る。こんな場所で駆け足ができるなんて！モンゴルの草原を走る緊張感と違った緊張感。上方の枝を避け、横の藪から何か生き物がでてきてもいいように注意を払いながらも、気持ちよくみんなで走ることができた。若いのに最初から最後まで気配りしてくれ、安全にリードしてくれたガイドさんありがとう！

時間が刻一刻と終わりに近づいていく、ああもうじき終わってしまう...と思っていると目の前にあらわれたのがあの有名なシギリヤ・ロック。ええ～突然すぎるご対面！頂上にいる観光客が米粒のように見える距離だけど、その全貌をしっかりと見られる絶好の場所。感激して写真を撮るのに夢中になっていると、ちょっと先に見覚えのある馬専用車。ああ、とうとう本当に終わりのね、残念だけど、本当に充分楽しませてもらった満足感で一杯。乗馬道中折々に待機して、馬や私たちのフォローをしてくれたスタッフさんも本当にありがとう！乗馬もスリランカも全身で楽しめたよ！

馬とスタッフ達とお別れをした後は先ほどのシギリヤ・ロックへの登頂。予想外に乗馬より怖くてハードな見学で、どうしてこんなところに壁画が!?という驚きよりも、壊れないかと心配な「らせん階段」と高さにおおびえていた印 象のほうが強かった。





スリランカ最後の六日目。今日はほとんどが移動なので、車の中ではのんびりと半分はお休み。時折目が覚めるが、今までの道中と変わらず、幹線道路なのに全く信号がない。それなりの交通量もあるのに、交差点もお互い譲りありながら絶妙なタイミングですり抜けていく。民度が高いに違いない、と感心する。

ドライバーさんが何やら叫んでいる、後ろに「馬がいる」という。あ、ホントだ、あの馬専用車と運転席にはガイドさんとスタッフさん。「Hello!」こちらの車はスモークガラスで見えないと思うけど、こちらからは良く見えてるよ、と一方的に挨拶をする。今日のスケジュールは全く別なのに偶然だね！というか、道がこれしかないからそうなるか？でも馬たちはどこへ向かうの？昨日出発した場所が「住まい」じゃなかったの？どうやらコロボ郊外が本当の「住まい」でそこに向かっているという。ツアーに合わせて各地に厩舎やスタッフの宿泊場所を整備しているようだ。

スリランカの乗馬・・・モンゴルのように生活と一体化している訳じゃない、だけど、スリランカの地形・気候・文化・歴史それぞれを乗馬しながら楽しめるように考えつくされたルートとスケジュール。スリランカに乗馬しに行く人はきっとそれほど多くはないと思う。だけど是非多くの人に行って感じて楽しんでもらいたい。そして広いスリランカの、更に地形・文化の違う地域までその乗馬ルートが広がる位に発展してほしい。

スリランカの何を何も知らずに訪れたが、自然豊かで、信仰心高く、純粋な人々に出会え、スリランカのことが大好きになって帰ってきた。